

西照

西照寺寺報「さいしょう」 第37号

2019年1月6日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40

郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
西照寺ホームページ <http://nisitera.eek.jp>

御正忌報恩講 勤修

左記のとおり御正忌の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

一月十六日(水) 午後二時～

※御正忌は一慶のみです。法要時の「しそおにぎり」は昨年で終了しました。

法話 住職

西谷山 西照寺



靈魂からの解放

日本人は、靈魂（たましい）を宗教としてどのような受けとめてきたのでしょうか。

岩波哲学思想辞典を見ると

民俗宗教では死後靈魂はこの世の近辺に在るが、次第に山など遠くへいくものの、お盆や正月にはまた身近に帰ってくると信じられてきた。この世の近辺にある期間は不安定な状態にあり、これが安定した状態に移行すると「成仏」し、「先祖」になったと考える。

また、神として祀られる場合もある。それがうまくいかないとき、この世に好ましくない事態が起こる。とりわけ、怨みや不安を遺した死者や祀る者のいない死者の靈魂は、長くこの世に悪影響を与えらるゝとする。「怨靈」や「祟り」の信仰も強い。

などと書かれています。

人は死ぬと肉体は滅んでも、非物質的な精神的実体としての靈魂は存在し続ける。死後しばらくは近辺に在るが不安定な状態にあり、残された者の供養などによって成仏したり先祖になったりする。それに失敗すると「怨靈」や「祟り」をもたらすものになると考えられてきた、ということなのです。

日本の歴史を生きてきた者には、多少なりとも無意識のうちにこ

う觀念が入り込んでいようにも思います。

普段は特に意識することはありませんが、原因不明の現象や不幸が続くと靈魂のことが浮上してくる。

よく見聞きするのは、自分が癌などの病気になる原因がよく分からない。治る見込みもない。不安で仕方がない。そういう時に、「何代前の亡くなった〇〇さんのことをちゃんと供養していないからだ」と言われると、ぴたっとそこにはまり込んで、真剣に恐れ悩んでいる方がおられるということです。

毒矢の譬え

それでは、仏教では基本的に靈魂をどのように見ているのでしょうか。

釈尊が目覚めた真実は、「縁起」とか「諸法無我」「諸行無常」などの言葉で表現されています。すべての存在は、様々なものが仮に依り集まって成り立ち、生成消滅変化を繰り返している。諸行（一切の存在）は無常であり、永遠普遍で固定的な実体というものは何も存在しない。ですから、永遠に変わらぬ実体として不滅の靈魂というものも存在しないということになります。

ところが、釈尊は「靈魂不説」の立場で、有るとも無いとも説いておられません。その理由として、「毒矢の譬え」を示されています。

『箭諭経』には、

毒矢に射られた人がいたとする。まわりの者はすぐに毒矢を抜いて手当をしようとしたが、この人が、この矢を射たものはどんなカーストに属する人間か、弓は何でできているか、弦の種類は何か、矢の幹・羽等は何でできているか等々をたずね、それらがわかるまでは矢を抜いてはならないと言ったとすれば、おそらくその間に毒は体内にまわって死んでしまうであろう。いま汝の問いも同様である。如來の答えが得られる前に、汝は命を失うであろう。また仮にこれらの問題に有・無のいずれの答えが与えられたとしても、われわれの、生あり老あり病あり死あるという苦悩の現実は何も解決しないではないか。(深川宣暢氏要約)

と説かれています。

つまり、靈魂が有るとか無いとかが問題なのではなくて、生老病死をなぜ苦にする私がいるのかということが問題の核心だということです。靈魂ばかりに目が向いていくと、有るとか無いとか不毛の泥沼に陥ってしまつて、私の問題の核心が見えなくなってしまう。

たとえば、私が病氣になつたとします。お医者さんでも治らない。その原因が靈魂の祟りだと思ひ当たらるとどうなるか。「靈魂さん何とか機嫌直してくださいよ」と四方八方手を尽くすのではないかと思ひます。場合によっては靈感商法に引っかかるかもしれないと思ひます。何が見えなくなってしまうのかというと、問題の核心である健康が百点で病氣が〇点だという私のものの見方そのものです。

そもそも「命」というのは自分のものではありませんから、自分の思

う通りになりません。私以外のさまざまなものに依り集まつて作(生)られています。時間がたつと経年劣化(老)していく。ときには故障(病)もします。そして最後は元のバラバラな状態(死)に戻つていく。本来は、生も老も病も死も状態が変わつていくだけであつて、どの状態にあるうとも百点満点なんです。ところが、その命を自分のものだと思ひ込み、自分に都合の良い我に執着してしか生きられない(我執から煩惱が起ころ)。死ぬまで一歩もそこから抜け出せない。

若くて健康で長生きすることが、素晴らしいことで私の求めていた喜びや安心満足だ。そして、うまくいかなくなると、靈魂や先祖の所為にして自分の問題の本質をごまかそうとする。それも煩惱の仕業なのです。そうして自分の問題の本質に気づこうともしない。その姿を親鸞聖人は、仏から知らされて「煩惱具足の凡夫」とおっしゃつてくださいます。

それでは、そういう私はどうしたらよいのか。

それは自分の本質的な課題に気づき「意識化」していくことだと思います。仏法を聞くというのもそういうことです。

釈尊は、「知つて犯す罪と知らないで犯す罪とどちらが恐ろしいか」という質問に対して、「それは知らないで犯した罪のほうが重くて恐ろしい」と説かれています。知らないと永遠にそこから解放されることはないのです。我執煩惱が私の本質的課題であると意識して送る生活と知らないで無意識に送る生活とは、知らない方はそこから解放され

(裏面に続く)

(中面からの続き)

ることがありませんから、闇が深いわけです。

以前、県内のお医者さんで禁煙に成功したという方の話を聞いたことがあります。禁煙しなければと思っではいるがなかなか止められない。そこで先生は、紙に煙草の害をいろいろ書いておいたそうです。そして煙草を吸いたくなると、その紙に書いてあることを順番に声を出して読んでいく。さすがに最後まで読んでいくと今日は止めようかという気になる。しかし、また吸いたくなる。そうするとまた紙を出してきて順番に読んでいく。最後まで読んでいくと今日もやっぱり止めとこうという気になる。しかしまた……、ということでも何十回も何百回も繰り返して、禁煙に成功したとおっしゃってしまして、印象に残っています。つまり、吸いたくなったら禁煙の害を出して読むことによって、徹底的に自分に「意識化」させることによって成功した。

実は、念仏申すということも、そういう一面があるのではないかと思います。

南無阿弥陀仏というのは、すべてのものを救いたいという阿弥陀如来の願い(本願)が込められた、私へのメッセージです。そもそも釈尊が気づいた私の命の事実は、生きとし生けるものは、みな相互に依存し関係し合いながら、父母兄弟のようにつながっているということ、いちいち「一一如(一つのひと)し」とも言います。私が救われようと思ったら、つながっ

ているすべてが救われなかったら、本当に救われたことにならないわけです。

そういう命を生きていながら、それに気づかず我執煩惱がしやうぼんのうでしか見れない。我執煩惱が満たされたことが幸せだ喜びだと生きていますが、それを靈魂が守ってくれようが崇たろうと、要は私たちはみんな死んでいかねばならないのです。我執煩惱の延長線に救いはないのです。

その私に命の事実(一如いちにょ)から、形を現し言葉(喚び声)となつて目覚めよ気がつけよと呼びかけてくださる方が阿弥陀様です。

生涯煩惱から抜けきれない私たちですが、煩惱の感情(特に苦しみや悲しみ)が起るたびに、如来の喚び声を口に出してその心(本願)を聞いていく。そうすると私の我執煩惱が問題の本質だと意識化されて、如来の本願こそ私の命の根源に宿された願いであり、そこにこそ私の命を尽くしていくべき救われる方向があると気づいていきます。

それが靈魂から解放されていく道であると仏教は教えているように思っています。

老・病・死の現実、悲しく辛いことですが、それは私の我執煩惱がしやうぼんのうが勝手にそう思っているだけで真実ではないのだと智慧の眼が開かれてくると、それを引き受けていける心の豊かさと安らぎがもたらされてきます。

合掌

(文責 住職)